

日本語パートナーズ派遣事業における カウンターパート教師支援

—タイの取り組みに関する報告—

羽吹幸・松本みなみ・ノッパワン ブンソム・生田守

1. はじめに

独立行政法人国際交流基金（以下、JF）は2014年度より、アジアの中学や高校などの日本語教育の現場で、現地の日本語教師や生徒のパートナーとして活動する日本語パートナーズ（以下、NP）を派遣する事業を実施している。NPを受け入れる現地校の日本語非母語話者教師はカウンターパート教師（以下、CP）と呼ばれるが、CPにとっては、それまで一人で日本語の授業を行っていたところ、NP派遣によって日本語母語話者であるNPと協力して日本語授業や日本文化紹介等の学校活動を行っていくことが求められるようになった。そのため、JFの海外拠点や日本国内の附属機関である日本語国際センター（以下、NC）では、NPと行うチームティーチング（以下、TT）について、現地でのワークショップや訪日研修という形で支援を行っている。CPに対する支援体制は海外拠点によって異なるが、本稿ではNP派遣事業におけるCP支援の取り組みについて、タイを事例として報告する。

2. 背景

2.1 NP派遣事業について

NP派遣事業は、2013年12月に実施された日・ASEAN特別首脳会議において、日本政府が表明した新たなアジア文化交流政策「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」(以下、文化のWAプロジェクト)を契機とした事業である。文化のWAプロジェクトでは、日本とアジア諸国との双方向の芸術文化交流の促進と日本語学習支援の強化を2つの事業の柱として展開することになり、「日本語学習支援の強化」についてはNP派遣事業が担うことになった(登里 2016: 113)。NP派遣事業は当初、2014年から2020年までの7年間でASEANを中心とするアジア諸国に3,000名のNPを派遣することを目標としていたが、Covid-19感染拡大の影響により2020年度のすべての派遣および2021年度の一部の派遣を中止したため、2024年3月末まで事業執行を延長して3,035名(アジア文化交流強化事業費充当分のみ)の派遣を達成した。NP派遣事業は各派遣先国から好評価を得て継続が要望されていたが、2023年12月に東京で開催された日本ASEAN友好協力50周年特別首脳会議において「次世代

共創パートナーシップ「文化のWA2.0」(以下、文化のWA2.0)が発表され、2024年度からの10年間についても引き続き実施することが決定された⁽¹⁾。

NPへの応募要件は、満20歳から満69歳までの日本国籍を有する日本語母語話者であることで、日本語教育の資格や経験は問わない⁽²⁾。NPに期待される主な活動は、CPのアシスタントとして授業をサポートすること、日本文化の紹介を通じて派遣先の生徒や地域の人々と交流すること、現地の言語や文化、社会について積極的に学び自身の体験を発信することである⁽³⁾。

2.2 NPに対する派遣サポート体制

タイのNPは2014年度より、年に1回、5月から2月の約10か月間、タイ教育省が管轄する6年制の中等教育学校に派遣されており、2024年度までに12期が活動している。タイNPの場合、派遣前研修から帰国までのJFからのサポート体制は図1のとおりである。NPの派遣にあたっては、渡航前に約4週間の派遣前研修を受けることが条件となっている。派遣前研修では、主に現地語学習と、現地の生活・日本語教育事情に関する講義、「やさしい日本語」、「TT体験」、「日本事情・日本文化紹介」といったNP活動に必要な知識と実務について学び、派遣に備える(登里 2021)。

タイへの渡航後は、約5日間の到着時オリエンテーション(そのうち、2日間はNP・CP合同研修)を受けた後、派遣校に赴任して前期を通して活動を行い、10月に再びNP・CP合同の中間研修に参加する。それぞれの派遣校での活動中には、JFバンコク日本文化センター(以下、JFBKK)の調整員とNP担当の派遣専門家およびタイ人講師によるNPチームが、すべてのNP派遣校への学校訪問と授業見学を行う⁽⁴⁾。訪問時の授業見学後は派遣専門家とタイ人講師がTTに関するコン

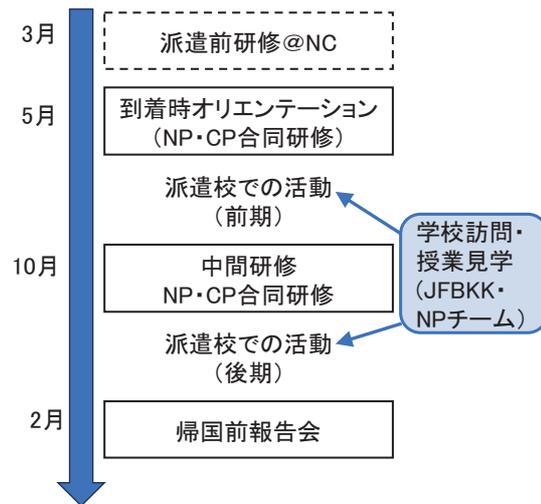


図1 タイ NP へのサポート体制

サルティングをNPとCP両者に対して行い、より効果的なTTができるよう助言を行う。帰国前には再びバンコクに全NPが集合し帰国前報告会を実施するが、10か月共に派遣校で活動をしたCPは任意で対面もしくはオンラインで報告会に参加する。帰国前報告会は、NPとCPが活動当初に立てた目標の達成度を確認し共有する場であるだけでなく、JFBKK外のタイの日本語教育関係者にもNPの活動を知ってもらう機会となっている。

2.3 NPを受け入れるCPの抱える課題

タイの中等教育機関からのNP受け入れ申請は、例年8月末を目途にJFBKKが受け付けを行っている。NPの受け入れ申請はJFの他のプログラムと同様に機関申請であるため、学校長や教務主任等の要望で申請が出されることが多いが、日々のNPとの協働や生活・健康面に関するフォローは日本語のできるCPが担うことがほとんどである。現地でタイの中等教師支援に携わるJFBKKには、特に日本語授業に関して、それまで一人で授業を行ってきたCPにとって日本語母語話者であるNPに授業内でどのような役割を担ってもらえばいいかわからず、戸惑いを感じることも少なくない様子が窺えた。また、タイの場合、CPの要件は日本語教授歴1年以上、日本語力はJLPTにおけるN4以上を目安としているが、NPの受け入れにあたっては日常的なコミュニケーションのみならず、NPに対してタイの学校状況について説明したり、授業等の教務に関する打ち合わせをしたりする程度の日本語力が必要とされる。こういったやり取りに慣れていないCPからは、NPとのコミュニケーションについて不安の声も聞かれた。NP派遣事業の円滑な実施のためには、NPに対する研修と並行してCPの抱える不安解消とスキルアップのための支援も非常に重要な意味を持つ。

3. JFBKKとNCによるCP支援の概要

以上のような状況から、CPに対する支援も、2014年のタイ1期NP派遣時から試行錯誤を繰り返して続けられてきた。文化のWA2.0によりNP派遣事業が今後10年間継続実施されることが決定した今、より良いCP支援体制についてJFBKKとNCとで改めて構築していくため、これまでのCP支援の取り組みについて整理し報告することとする。なお、2015年派遣のタイ3期までは派遣時期の揺れがあったが、ここで報告するのは、Covid-19禍を例外として固定してきたタイにおけるNP派遣事業の流れである。

3.1 NPの受け入れ申請から派遣決定まで

2.3で述べたとおり、NPの派遣を希望する中等教育機関は8月末を目途にJFBKKに申請を行い、JFBKKは申請を元に学校調査を実施する。並行して日本国内のNP事業部ではNPの募集選考を実施し、書類と面接による2回の選考を経て、12月中を目途にタイに派遣するNPの内定が決定する。JFBKKでは申請のあったタイの中等教育機関とNP内定者のマッチングを行い、2月下旬頃に申請校に対してNP派遣の決定通知を行う。

3.2 JFBKKによるCP支援①NP到着時から帰国まで

JFBKKでは、NPとCPがより良い協働ができるよう、CPに対しての研修や支援を実施している。CPに対する支援は、NPがタイ到着後の「CP向け研修」から始まり、「帰国前報告

会」の前に NP と立てた目標の達成度を確認するところまで行われる。表 1 は、JFBKK による CP 支援の流れと方策である。

表 1 JFBKK による CP 支援の流れと方策 (タイ12期 NP の場合)

支援項目	実施場所	対象者	対 CP 支援方策
①「新規校 CP 向け研修」および「CP 向け研修」(NP 到着時の「NP・CP 合同研修」の前日に実施)	JFBKK	CP	<ul style="list-style-type: none"> NP 派遣事業、TT 等の必要な基本知識を提供する。 NP との TT 授業への心構え作り、CP 同士のネットワークを広げる場を提供する。 NP と協働で行う文化紹介について考える場を提供する。
②「NP・CP 合同研修」	JFBKK	CP & NP	<ul style="list-style-type: none"> NP と活動するためお互いを知り、NP に学校情報や授業の進め方を共有する場を提供する。 基本的な TT の方法を NP と確認し、TT の体験をする場を提供する。 他校の CP・NP と交流する場を提供する。
③目標設定	各派遣校	CP & NP	<ul style="list-style-type: none"> NP に学校の現状を伝え、NP と日本語の授業、文化紹介に関する目標とその方策を設定する課題を与える。(NP がシートに現状認識・目標・方策を記入し、JFBKK に提出する。)
④前期：現場での実践	各派遣校	CP & NP	<ul style="list-style-type: none"> 現場での TT や日本文化紹介、その他日本語教育全般に関する相談にメール等で随時対応する。 TT や日本文化紹介、日本語教育に関する情報をメール等で随時共有する。 派遣期間中に各校 1 回授業見学を行い、TT と教授法の助言をする。
⑤「CP よろず相談会」	オンライン	CP	<ul style="list-style-type: none"> CP 同士の情報交流の場を提供する。 CP の抱えている問題の解決法や、TT、日本語教育全般に関する情報などを提供する。
⑥「中間研修」(後期の目標設定)	JFBKK	CP & NP	<ul style="list-style-type: none"> NP とこれまでの協働を振り返る場を提供する。 CP 同士で NP との協働について意見交換する場を提供する。 TT をより効果的に行う方法を考える場を提供する。 後期に向けての目標とその方策を立てる課題を与える。 他校の NP や CP と意見交流を行い、ネットワークを広げる場を提供する。
⑦後期：現場での実践	各派遣校	CP & NP	④と同様の支援を行う。
⑧目標の振り返り(NP「帰国前報告会」までに実施)	各派遣校	CP & NP	<ul style="list-style-type: none"> 後期に NP と一緒に立てた目標の達成度を振り返る課題を与え、成果に対しフィードバックを行う。(NP がシートに成果を記入し、JFBKK に提出する。)

2.2にも記述したとおり、JFBKK では NP 到着後にバンコクにて約 5 日間の到着時オリエンテーションを行う。オリエンテーションの際、全派遣校 CP に対してもバンコクにて調整員によるオリエンテーションと NP 事業担当タイ人講師による研修を行っている。NP を新規に受け入れる CP が多い期では、「新規校 CP 向け研修」⁽⁵⁾を実施する。「新規校 CP 向け研修」では NP 派遣事業や NP の役割、TT について理解することを目的に、NP 派遣事業や TT による教え方、NP との協働といった基本的な知識を提供し、NP と日々の学校生活で協働することに対して自信が持てるようサポートをする。その後、全派遣校の CP を対象にした「CP 向け研修」を実施する。ここでの目的は、主に NP との TT 授業への心構え作りと CP 同士のネットワーキングである。年によって異なるが、日本語授業や文化紹介についても過去の NP と CP

による TT の動画を見て、自分の学校ではどのように実践するか、NP 受け入れの経験がある CP を中心にグループ内でブレインストーミングをするなど、実践的な内容について考え、学ぶ機会を提供する。

到着時オリエンテーションの最後には、2 日間の「NP・CP 合同研修」を実施する。研修の目標は、次の 3 点である。

- ①これから一緒に活動するための心構えをする
- ②CP 主導で TT を体験して、気づきを得る
- ③他校の CP・NP と交流する

①では、NP と CP の初対面となることから、アイスブレイクや自己紹介、CP から NP への派遣校情報の共有など、学校ごとのセッションに多くの時間をかけ、NP と CP がこれから派遣校で協働するための準備を行う。②では、全体で TT での NP と CP の役割を確認した後に、NP と CP で初めての模擬授業に挑戦することを通して、TT での実際の動きを確かめ、お互いのやり方を知る機会を設ける。③では、他の派遣校とのグループワークの時間を設けることで、CP 同士のネットワーク構築を目指す。

次に行う研修としては、前期が終わり、NP の派遣期間が半分を迎えた10月に、対面による約 2 日間の「中間研修」を行う。各派遣校には複数の CP がいることが多いが、NP と合同で行う「中間研修」には、1 名の CP の参加を必須としている。研修の目標は、次の 3 点である。

- ①前期の活動を振り返る
- ②研修中の活動で得たアイデアを活かして、後期の TT や活動の改善案を考える
- ③他校の NP や CP と意見交流を行い、ネットワークを広げる

①では、NP 着任時に NP と CP が一緒に掲げた目標の達成度を学校ごとに確認し、その後、参加者同士で前期の活動内容について報告を行う。②では、研修中に実施する前期の活動報告や TT 模擬授業を通して、他の NP と CP の実践を知り、お互いに疑問や悩みを共有しながら解決案を模索することで、後期に向けての目標を設定し直す。また、③では、NP と CP が共に他の学校とのグループワークを行うだけでなく、NP と CP とを別々に分けたセッションも実施する。CP だけのセッションでは、NP との協働についての悩みや疑問について CP 同士で意見交換し、解決方法についてディスカッションする機会を提供する。

研修以外の主な支援としては、NP 派遣期間中に最低 1 回は各派遣校を訪問し、TT 授業の見学と NP・CP 双方に対するコンサルティングを行う。コンサルティングでは、まず、NP と CP に合同で、見学した授業での TT について振り返りをしてもらう。「NP・CP 合同研修」時の TT 模擬授業で使用した振り返りシートを参考に、実際の授業で NP と CP の役割分担が適切にできているか、NP と CP と生徒の三者で日本語によるコミュニケーションがバランス良くとれているかなどを振り返る。その後、NP・CP 別に分かれ、CP に対してはタイ人講師

より授業の進め方や教授法など、日本語教育全般に関するフィードバックを行う。

NPの「帰国前報告会」の実施前には、「中間研修」後に立てた後期の目標の達成度をNPとCPが一緒にふり返る課題を与える。NP担当の派遣専門家が、NPが目標の達成度を記入したシートを確認し、フィードバックを行う。

3.3 NCによるCP支援

NP派遣事業ではその実効性をより高めるため、NP派遣校に所属するCPを日本に招聘し2週間の研修を実施している。タイCPの場合、NPが現地で活動する派遣時期とずらして3月中に実施されることが多いが、訪日研修に参加するCPの選考には①NP受け入れ経験があること、②今後もNPを受け入れる可能性のある派遣校に所属していること、の2点を優先している。加えて、NP受け入れ時の協働の様子や訪日歴、研修経験等に鑑みてどのCPを参加させるのが望ましいか、JFBKKとNCの教務とで適宜意見交換をしつつ共に選考にあっている。NCでの訪日研修は、CPにとっては日々の校務から離れて改めてNPとの協働に関する学びを集中的に得られる機会であるため、本節では少々詳しく訪日CP研修の内容について報告する。

3.3.1 研修の概要

訪日CP研修では広範な知識を扱うのではなく、帰国後にNPと実際に実践できる学びを重視する。研修の目標は次の3点であり、研修の全体構成は図2のとおりである。

- ①NP（日本人）と協力することの意義やそのための方法を学ぶ
- ②日本の社会や文化に触れながら、日本を知り、理解を深める
- ③日本語を使ったさまざまな活動を通して、日本語の力を伸ばす

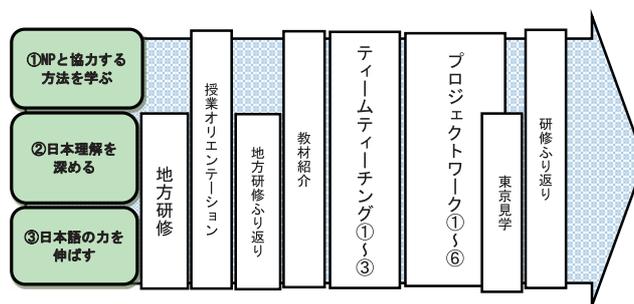


図2 研修の全体構成 (2022年度の例)

「①NPと協力する方法を学ぶ」では、普段NPと行っている日本語授業TTのふり返りと実践共有を行い、CPとNPそれぞれの役割を確認した上で模擬授業を行い、より効果的にTTを行う方法について考える。また、プロジェクトワークの計画や素材集めなどを日本人ボランティアと共に行うことで、NPと共に作り上げる文化紹介について改めて考える機会とする。

「②日本理解を深める」では、大分県での地方研修と東京見学で日本の地方と都市部を実際に訪れてさまざまな日本文化を体験し、日本人との交流活動を行う。また、訪日期间中に注目した日本の社会や文化からプロジェクトワークのテーマを決定するが、その設定テーマについての考察やディスカッションを NP 経験者である日本人ボランティアと共に行うことで、日本社会や日本文化、日本人について理解を深め、自信を持てるようにする。授業とは別に、各自の日本での体験を整理し記録するためのツールとして、研修期間を通してポートフォリオ作成にも取り組む。

「③日本語の力を伸ばす」では、訪日研修である点を活かし、地方研修や東京見学などでの市井の日本人との交流、授業中の研修参加者同士や日本人ボランティアとのディスカッションなど、日本語を実際に使う機会を多く設けることで日本語運用力のブラッシュアップを目指す。

3.3.2 研修内容

(1) TT①～③

TT の授業目標は、他の研修参加者が行う模擬授業の観察や自身の模擬授業に対するフィードバックを通して、自身の TT 授業をより良くするための具体的な方法やアイデアを得ることである。計 8 時間を 3 回に分けて実施する。

TT①ではまず、それぞれの学校の日本語クラスの状況について、日本語を学習する学年、必修か選択かの種別、日本語クラブや文化紹介の有無、使用教科書等、教授環境に関する基本情報を共有する。次に、あるコマの教案に沿って CP と NP の具体的な動きを書きだし、両者の授業内での役割や活動のバランスを確認する。TT②では、NC の日本語教育専門員（以下、専門員）を NP 役として、一人当たり 20 分の模擬授業を行う。模擬授業についての評価は、生徒役を務めた他の研修参加者や NP 役を務めた専門員による他者評価と、自身のデバイスで撮影した授業動画を見直すことによる自己評価の双方向で行う。日頃の自身の TT について客観的かつ内省的に振り返ることで、今後の NP との協働で自身が努めたいアクションプランを具体的に策定する。

(2) プロジェクトワーク①～⑥

プロジェクトワークの授業目標は、訪日期间中に体験した日本社会や文化の“今”から生徒に紹介したいテーマを決め日本人ボランティアと協力して素材を集めること、そして NP と協働して行う文化紹介の授業の流れを作ってみることである。計 15 時間を 6 回で実施する。

プロジェクトワーク①では、まず、NP と実施したことのある文化紹介のテーマについて個々に書き出し、特に生徒が盛り上がったものについての紹介および具体的なやり方についてアイデア交換を行う。その後、「日本事情・日本文化のトピック」の図（国際交流基金 2010：6）を参考に、自身が普段取り上げている文化紹介のテーマに偏りがないかを確認し、文化紹介の

テーマを決める際に参考にすべき視点について理解する。そのうえで、今回の訪日研修で取り組みたいテーマをグループで決め、授業で活用するために集めたい素材（写真、動画、レリア等）、行きたい場所や経験したいことについて仮案を作成する。

プロジェクトワーク②～⑤の2日間は、NP 経験者である日本人ボランティアも参加して共に活動を行う。初日の②③は、CP が調べたいと思っているテーマと集めたい素材についてボランティアに説明し、具体的な行動計画ができれば順次外出して終日素材収集を行う。

次の日のプロジェクトワーク④では、各グループで集めた素材データの整理をしつつ、他のグループに紹介したい素材を1つ選び、素材収集の成果発表として全体共有を行う。その後、文化の考え方を体験するため、「3つのP」(国際交流基金 2010:16-17)を用いたワークショップを行う。これは、文化について生徒にどのように考えさせたいかを自身で実際に体験してみるためであるが、同時に、ある一つの文化事象について個々人がどのように考えるか、他者との意見交換を通じて自分とは異なった着眼点や捉え方を知る体験をねらいとしている。

プロジェクトワーク⑥では、プロジェクトワークの成果を1グループあたり20分で発表を行い、他のグループのCP や任意参加のボランティアからフィードバックを得る。表2は、2022年度 CP 研修参加者15名が取り組んだ発表テーマと概要、収集した素材である。「発表テーマ」、「選んだ理由」、「生徒に考えさせたいこと」は、CP 研修参加者が作成したままである。

表2 プロジェクトワークの発表テーマと概要（下段、収集素材）

発表テーマ	選んだ理由	生徒に考えさせたいこと
駅	日本人にとって駅は身近な場所だから。	・駅にあるそれぞれの建造物は何のためにあるか。
	駅にあるものの写真や動画（券売機、ロッカー、改札機、エスカレーター・エレベーター、点字ブロック、案内・禁止表示、ATM、待ち合わせオブジェ、証明写真機、ポスト）	
バス	・教科書に出てくるテーマだから。 ・日本の乗り物について知りたいから。	・タイと日本のバスの乗り方はどう違うか。 ・車内ルールは異なるか。
	写真・動画（バスの種類、バス停、時刻表、バスの中、行先表示、運賃箱での支払い方）、レリア（切符）	
電車	・大きい町では電車に乗る人が多いので、生徒たちに乗り方を教えたいから。 ・生徒たちが旅行や留学で来た時に迷わずに乗れるよう教えたいから。	・タイと日本では切符の買い方、電車の乗り方はどう違うか。 ・マナーは違うか。
	写真（電車、切符、路線図、改札口） 動画（切符の買い方、電車の乗り方、鉄道博物館）	
買い物の はらい方	日本に来たらとても必要だが、教科書の言葉や表現とは違い、新しい支払い方法も増えているから。	・店員がいるのに機械で支払うことをどう思うか。 ・現金とカードの良い点と悪い点 ・タイと日本の支払い方の違い ・将来どのような支払い方法が望ましいか
	さまざまなお店の支払い場面の動画（サーティーワンアイスクリーム、宝くじ、ABC-MART、スタバ、ユニクロ、スーパーのセルフレジ）	

日本語パートナーズ派遣事業におけるカウンターパート教師支援

お店	<ul style="list-style-type: none"> ・タイにも日本にもあるが、同じかどうか生徒に考えさせたいから。 ・日本人の生活を見せたいから。 ・日本とタイの店を比べさせたいから。 	タイと日本のお店はどんなところが違うか。 <ul style="list-style-type: none"> ・コンビニとスーパーの商品、支払い方、利用できるサービス ・ラーメン屋さんのメニュー、注文の仕方、支払い方法
	写真・動画（コンビニの支払機、トイレ、充電レンタル、ATM、外貨両替機、スーパーのセルフレジ、一蘭での注文方法）、レシート	
自動販売機	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は自動販売機に興味があるから。 ・いろいろな種類の自動販売機や使い方を知りたいから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どうしてこのような自動販売機があるのか、どうして人気なのか。 ・自分が作るとしたら、どんな自販機を作りたいか。
	写真・動画（商品、値段、あたたかい・つめたい表示、支払い口、おつり・返却口、ペットボトル回収口、買い方）、珍しい自販機の写真（フィギュア、冷凍ラーメン、うなぎ、焼き芋、おでん、缶入りパン、熊カレー、ユニバーサル自販機）	

(3) 文化体験プログラム

CP研修では文化体験プログラムとして、大分県での地方研修と東京見学を実施する。目的は日本の地方と都市部を訪れることでそれぞれの地域性を感じ文化を体験することである。特に地方研修では、高校や大学を訪問し生徒や学生との交流活動や意見交換を通して日本や日本人についての理解を深める。東京見学では、都内の主要な名所を訪れるが、訪問先はその年度の研修参加者の訪日経験を考慮しつつ検討される。

(4) ポートフォリオ

NCの他の教師研修と同様、CP研修においても特に研修の目標「②日本理解を深める」に関連してポートフォリオ作成に取り組む。わずか2週間の研修であるが、地方研修やプロジェクトワークでのボランティアとの外出時に自身が見聞きした日本について、「びっくり／すごい／おもしろい／わからない／いや」と感じたものを写真に残してポートフォリオに記録し、研修まとめのふり返りでお互いの体験共有のためのツールとして活用する。CPがどのような日本体験を印象的と捉えているか、表3に2022年度のCP研修参加者が取り上げたものを例示する。

表3 ポートフォリオで取り上げられた日本体験⁶⁾

びっくり	海地獄2、血の池地獄2、温泉2、温水洗浄便座のボタン2、国内線搭乗券、足湯、路線図、竹細工、エスカレーターの乗り方、女性の喫煙、タクシーの運転、観光地なのに人が少ない、コンビニのセルフレジ、猫カフェ
すごい	ホテルの温泉プール、さいたまの気温（涼しい）、車酔い薬、自動販売機、ユニクロのセルフレジ2、教室のホワイトボード、着物着付け、日本の高校生、都会の交差点、コンビニでスタバドリンクが買える、分別ゴミ箱、高校の設備、路線図、駅前のデパートの多さ、果物サイダーの種類、バスの時刻表、地獄蒸し2、ホテルの浴衣、食物科の高校生が作ったランチ
おもしろい	クレーンゲーム、地獄蒸し2、寒いのに食べるソフトクリーム、マンホール、駅前の屋外喫煙所、銀座のタイ料理レストラン、着物着付け体験2、新幹線弁当、軽自動車の形2、クレープの種類、トイレトペーパーの捨て方、紙バック入りのお酒、温泉プール、タイヤ付きのテーブルと椅子、自動販売機のデザイン、ごみの分別、お店の前で食べるスイーツ、くるくるコイン募金箱2、海地獄の形、1日バス乗車券、ソックスガチャ、お茶漬け、高校・APU訪問、竹細工、別府タワー
わからない	マンホールのデザイン、駅の発車時刻表示、駅の名前（漢字）、お菓子の自動販売機、福神漬け、電車の乗り方、梅おにぎり、コンビニ・スーパーのセルフレジ2、照明器具のリモコン、お茶漬け・鯛茶漬け2、水とお茶の値段、電車の路線、三角に折ってあるトイレトペーパー
いや	原宿（人混み）、観光地の398段の階段、和食（野菜）、10%の消費税、麺をすする音、カラス、和式トイレ2、漬物、鯛茶漬け、由布院へのバス（車酔い）

3.4 JFBKK による CP 支援②「CP よろず相談会」

JFBKK では、Covid-19の拡大により 8 期 NP の派遣が中止になった2020年より、派遣校 CP を対象に NP 派遣事業を担当するタイ人講師主導のオンラインによる「CP よろず相談会」を実施している。当初は NP が派遣される予定だった派遣校への支援の一環として、「CP よろず相談会」が実施された。その後、派遣が再開された 9 期以降も「CP よろず相談会」を継続して実施している。この相談会は CP が抱えている日本語教授上の問題を共有し、解決策を考えたり情報交換をしたりすることを目的としており、教授経験が長い CP に相談会の進め役として話し合いを進行してもらいながら、タイ人講師がファシリテーターを務める。NP 派遣期間中 3～4 回、平日の夕方に 50 分間実施し、毎回 10 人前後の CP が任意で参加している。

2023年度第 1 回「CP よろず相談会」では、直近の訪日研修に参加した CP に研修での学びとその後の実践について報告をしてもらう機会を設けた。NC 研修への参加報告は2021年度の「CP よろず相談会」でも実施したことがあったが、この年度の CP 研修は訪日ではなくオンラインでの実施だったため、改めて訪日 CP 研修後の実践フォローアップとまだ訪日研修に参加したことのない CP に対する情報提供を目的として、2022年度訪日 CP 研修に参加した15名のうち 3 名に研修での学びとその後の実践について報告してもらった。この CP による報告は、NC での訪日研修と JFBKK によるフォローアップ連携に関係するため、4 章で詳しく述べる。

4. 成果および今後の CP 支援に関する課題と方向性

3 名の CP による「CP よろず相談会」での発表内容は、表 4 のとおりである。

表 4 CP 研修での学びとその後の実践

	学んだこと	コメント
A先生	日本語TTについて	以前はNPにどのような役割をしてもらえばいいか悩んでいたが、他の先生のTT模擬授業を見て、自分の授業と比べて学ぶことができた。それらの方法を自分の授業に取り入れたり工夫したりできている。
B先生	NPとの協働について	NPと一緒に授業計画を立てたり、役割分担を明確に確認し合うようになった。授業後にも、二人で改善点などを話し合おうと思う。TTは教えるテクニックの一つだと思う。
C先生	文化紹介について	以前は文化の授業の内容はあまり多くなかったが、文化紹介のテーマは思ったより多くあるとわかった。さっそくNPと相談してテーマを決めたり、一緒に資料を調べたりしたので、それらを文化紹介の授業に取り入れようと思う。

3 名の報告によると、訪日研修で学んだことの中からそれぞれの教授環境で実行できることが実践できており、これから NP とすべきことも明確に認識できていることがわかる。特に B 先生の「TT は教えるテクニックの一つだと思う」という発言は、NP 受け入れ前の CP がそれまで一人で行っていた教え方に加えて、日本語母語話者である NP との協働による教え方を体得した自信のようなものが感じられる。こういったテクニックを手に入れたという発言から、日々の日本語授業で NP と協働することが CP にとっては教師としての成長に大きく役立

つ経験であることが裏付けられるだろう。「CP よろず相談会」に参加していたその他の訪日研修参加者にも「訪日研修で学んだことを帰国後授業で活用しているか」聞いてみたところ、3名からプロジェクトワークで収集した素材や自身で撮影した動画等を使って生徒に紹介をしたという回答が得られた。訪日前の段階では「日本事情や日本文化をあまり知らないので、教える自信がない」と考えている CP が多かったが、日本で実際に体験し考えたことについて、自信を持って教えられていることがわかった。

JFBKK としては、長年、教員養成や教師研修でタイ人日本語教師への支援を続けており、2014年度の NP 派遣開始からは新たな局面として CP として活動するための支援を10年以上実施してきたが、この間、CP の態度や行動、授業に対する目標の明確化といった変化を感じている。NP 派遣事業において NP はあくまでもアシスタントの立場であることから、NP と CP が両輪として生徒のためのより良い日本語教育活動を行うためには、CP への支援および教師としての成長は欠かせないと考えられるが、NP を受け入れて CP としての立場になること自体が教師としてもう一段階成長するための好機となっている。

今回、CP 支援についての取り組みを本報告にまとめるにあたって、JFBKK と NC とで共に CP の抱える困難点および CP 支援に関する一連の流れについて改めて整理してみたが、これまで JFBKK による CP 支援では協働に関して日本語授業面での TT 支援が主になっており、文化紹介面での協働について助言することは少なかったことが確認された。「CP よろず相談会」での聞き取りによれば、訪日研修を通して特に「文化を知った」という意見が多かったが、「協働を学んだ」という意見もあった。文化紹介は NP 主導で実施されることが多く、協働というよりは分担になっている派遣校もまだ多いことから、JFBKK による研修や学校訪問時のコンサルティングの機会等も活用して、文化紹介授業での協働についても引き続き助言をしていきたい。

NC で実施する訪日 CP 研修の3つの目標のうち、「②日本理解を深める」と「③日本語の力を伸ばす」は他の教師研修にも共通するものであるが、「①NP と協力する方法を学ぶ」については CP 研修特有のものである。文化の WA プロジェクトにより、NC において CP に対する訪日研修は2015年度から開始された⁽⁷⁾が、訪日によって CP 自身の日本理解を深めるだけでなく、現地での協働の実際について JFBKK から密に情報提供を受けることにより、CP として実践的な学びが得られるような研修カリキュラム策定の試行錯誤が続けられている。NP 活動中のほとんどの期間にわたって NP と CP 双方を支援する役割を担う JFBKK からの情報提供と意見交換による連携は、2週間の研修期間を最大限有効に生かす研修内容の策定に大いに役立っている。3章で報告した CP 支援の概要は、これまでの NP 派遣において、JFBKK と NC とで密に現地での協働の状況について情報を共有し、より良い協働のための意見交換を繰り返してきた成果としての支援体制の流れである。

一方で、3.4で述べた「CP よろず相談会」については実施開始からまだ数年のため、今後も引き続き実施形態や内容について検討の余地があるだろう。3章のCP支援の流れを概観すると、訪日研修後のフォローアップ体制についてはまだ脆弱であり、今後は訪日研修で学んだことが現場で活かされているかのフォローアップの場として「CP よろず相談会」を明示的に位置づけ、積極的にCPに参加を促していくことが肝要である。これまでもJFBKKとNCの教務間では、訪日研修時の学びについて、CPの様子や研修の成果物を共有する連携体制が取られているが、訪日研修後の実践支援をJFBKKが担っていくという継続的な連携が求められる。

今回はタイでの取り組みについて報告したが、今後、文化のWA2.0によって10年間の継続が決定したNP派遣事業をより良く展開していくためには、NP派遣各国におけるNPとCP双方への支援の取り組みについて横のつながりで情報共有をし、共に検討していくことも必要だろう。NP派遣事業を契機として、NPを受け入れるCPにとって教師としての成長にも寄与し、引いてはJFが展開する海外の日本語教育支援事業の成果にもつながっていくことを切に望む。

〔注〕

- ⁽¹⁾ 国際交流基金 特別事業／周年事業等「次世代共創パートナーシップー文化のWA2.0ー」
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/special/bunkanowa2/index.html>> (2024年8月26日)
- ⁽²⁾ 一部の国では、滞在査証取得のために年齢や学歴等の要件が異なる。
- ⁽³⁾ 国際交流基金日本語パートナーズ「パートナーズって？」
<<https://asiawa.jpf.go.jp/partners/overview/>> (2024年8月26日)
- ⁽⁴⁾ 1期～10期は、北部担当および東北部担当の日本語専門家にも協力を得て学校訪問を行っていたが、11期、12期は30校と派遣校の数が減少したことにより、JFBKKのNP担当日本語専門家とタイ人講師が全派遣校を回っている。
- ⁽⁵⁾ 「新規校CP向け研修」は、新規校が大幅に増えた2019年7期派遣時より実施を始めた。実施状況は派遣期によって変動的である。2020年8期はCovid-19拡大のため派遣が中止となり、2021年9期もCovid-19の影響で派遣グループにより派遣時期に差が大きかったため実施しなかったが、10期～12期は実施した。
- ⁽⁶⁾ 表内の数字「2」は、「2名」のCPが取り上げたことを表す。
- ⁽⁷⁾ NCでの訪日CP研修は、タイ以外にも、インドネシア、ベトナム、マレーシア、フィリピン、ラオスのCPを対象に実施した実績がある。

〔参考文献〕

- 国際交流基金 (2010) 『国際交流基金教授法シリーズ第11巻 日本事情・日本文化を教える』、ひつじ書房
登里民子 (2016) 「『日本語パートナーズ』派遣事業の概況」『国際交流基金日本語教育紀要』12、113-120
登里民子 (2021) 「日本語パートナーズ派遣前研修のコースデザイン」『国際交流基金日本語教育紀要』17、203-214

■執筆者

羽 吹 幸	国際交流基金日本語国際センター日本語教育専門員
松 本 みなみ	国際交流基金バンコク日本文化センター日本語専門家
ノッパワン・ブソム	国際交流基金バンコク日本文化センター日本語講師
生 田 守	国際交流基金日本語国際センター日本語教育専門員